子連れ忘年会 増えてます

働くママ参加しやすく

企業が配慮 社員の相互理解に

忘年会シーズンがピークを迎えている。最近は子連れで参加できる忘年会を企画する企業が増えているようだ。子育て中の女性が参加しやすくなるのはもちろん、社員が互いの家族を知って配慮し合えるようになるなどの効果が生まれているようだ。（片山由紀）

札幌市厚別区の税理士法人アンビシャス・パートナーズは2013年から、子連れ忘年会を実施している。従業員16人のうち、10人が子育て中の女性。忘年会に「子どもがいるから行けない」との声が上がったため、子連れでの参加を呼びかけるようになった。

初回は居酒屋の個室で開催。未就学児や小学生ら8人が参加したが、子どもたちが騒ぎ大人がゆっくりできなかったため、翌年はレストランのパーティールームを貸し切りにした。その後も事務所内に料理を取り寄せたり、カラオケルームの個室を利用したりと、毎回会場選びは工夫している。

忘年会は、おもちゃが当たる子ども向けのビンゴ大会が恒例で、それを楽しみに参加する子も多い。小学2年と5歳の息子がいる同社マネジャーの小笠原史織さん(39)は「従業員が家族ぐるみで付き合っていると、子どもの病気で急に休まなければならない時に助け合える。母親の働く環境を見せられ、子どもにとっても社会勉強になっていると思う」と話す。

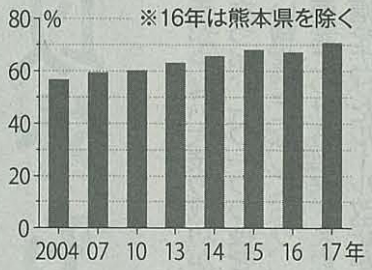
アンビシャス・パートナーズが社内で実施した忘年会。ビンゴ大会で盛り上がる社員や子どもたち＝2015年（同社提供）

同社は在宅勤務を認めており、月に1度の社内会議の時のみ出社する社員もいる。森下浩代表(43)は「忘年会は社員がコミュニケーションを図る貴重な場。できるだけ多くの社員が参加できるよう工夫したい」という。

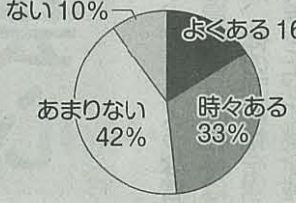
同市豊平区の丸吉日新堂印刷も子連れ忘年会が恒例だ。従業員6人のうち3人が子どもがいる女性。13年ほど前から、忘年会には子どもも加わるようになった。昨年は1泊の社員旅行を実施し、子どもも同行した。今年は11月末に同区内の焼き肉店で開催。いずれも費用は全額会社が負担した。阿部晋也社長(47)は「親の仕事が忙しいと犠牲になるのは子どもたち。母親が働いている間、がんばって留守番している子どもたちのことも気にかけたい。従業員も家族も楽しめる場をつくりたい」と話す。

子育てしながら働く母親は年々増加している。17年の国民生活基礎調査によると、18歳未満の子どもがいる働く女性は全体の70・8％で過去最多。一方で、人材サービス会社「エン・ジャパン」が15年に子育て中の女性社員や子育てしながら働いた経験がある女性約2千人にネットで調査したところ、職場でのコミュニケーションで「困ったことがある」（よくある、時々ある）と答えた人は49％と約半数を占めた。

関東学院大の井田瑞江准教授（家族社会学）は「かつての忘年会であれば、子どもがいて来られないなら仕方がないか、無理してでも来いという雰囲気だったが、働く女性の増加で企業もずいぶん柔軟になった。在宅勤務やフレックスなど働き方が多様化する中、企業もいかにコミュニケーションの場をつくるかを考えているのだろう」と分析。一方で「不妊治療中の人や独身者など、子どもの参加に嫌な思いをする人もいる。企業は従業員の個々の思いにも配慮して、コミュニケーションの場を創出してほしい」と呼びかけている。



18歳未満の子どもがいる働く母親の割合（国民生活基礎調査）



職場でのコミュニケーションで困ったことはあるか（エン・ジャパン「エン転職」調査）

※調査は子育て中の女性が対象。数値は四捨五入したため、100%にならない。